

SINAPS Forum

SINAPS Forum 報告書

2011年11月29日
JTF 標準スタイルガイド検討委員会
報告書作成: 東 尚子

SINAPS Forum ナビゲーター

東尚子(個人翻訳者)
高橋聡(個人翻訳者)
中村哲三(Yamagata Intech)

SINAPS Forum 運営メンバー

JTF 標準スタイルガイド検討委員会
浅川佳秀
井口耕二
高橋聡
田中千鶴香

1. SINAPS Forum 設置の経緯と目的

社団法人 日本翻訳連盟 (JTF) の標準スタイルガイド検討委員会では、JTF が推奨する翻訳用スタイルガイドの編纂に先立ち、JTF 会員企業をアドバイザーとしてお招きして専門的なご意見をいただくのと並行して、インターネット上で広く意見を募るための SINAPS Forum を開設しました。

この SINAPS Forum の目的は、以下のとおりでした。

- ・ 翻訳業界で広く使用できる標準的な日本語表記ガイドラインを作るための準備として、見識を広げること。
- ・ 特定のスタイルについて結論を出すことが目的ではなく、さまざまな立場の人が、お互いの意見をじっくり聞いて、日本語表記について考えること。

2. 開設期間と実績

SINAPS Forum は、トピックを立ててディスカッションを行う形式のフォーラムでした。閲覧のみであればユーザー登録は不要とし、発言する場合にはユーザー登録を必須とする形にしました。SINAPS Forum の開設期間と実績は次のとおりでした。この数値は Google Analytics によるものです。

- ・ 開設期間:2010年5月～2011年3月末
- ・ このサイトのユーザー数 3,917
- ・ すべてのトラフィックからの合計セッション数 8,374
- ・ 38 国/地域からのセッション数 8,374
- ・ このサイトのページが表示された合計回数 32,825

3. 主な意見交換テーマ

SINAPS Forum では、さまざまなトピックの下で意見交換が行われましたが、その根幹にある重要なテーマはこの3つに集約されると考えます。

- (1) スタイルガイドとの付き合いかた
- (2) スタイルガイド遵守と翻訳品質
- (3) 日本語スタイルガイド編纂の方向性

(1) スタイルガイドとの付き合いかた

現状として、スタイルガイドとどのように付き合っているか、翻訳者と翻訳会社のそれぞれから意見が出ました(付録 A-1 をご参照ください)。

まず、受注側である翻訳者は、分野によってまったくスタイルガイドの認知度が異なることが分かりました。

スタイルガイドが支給されることの多い IT 分野では、スタイルガイド遵守に原則として従いながらも、それに起因する非効率性に苦勞している様子が見られました。

一方、翻訳会社は、受注側であると同時に発注側でもあります。全体としてスタイルガイド遵守を重視する傾向が見られました。

また、スタイルガイド自体の管理についての問題点を指摘している意見もありました。

(2) スタイルガイド遵守と翻訳品質

この SINAPS Forum でたびたび言及された重要なテーマの1つが、スタイルガイド遵守と翻訳品質の関係性でした。つまり、スタイルガイド遵守を品質の測定基準とすべきなのか、という疑問です(付録 A-2 をご参照ください)。

絶対的な解決策は出ていませんが、標準スタイルガイド編纂を機に、翻訳業界に向けて疑問を投げかけ、再考を促すきっかけになるのではないかと考えます。

(3) 日本語スタイルガイド編纂の方向性

ディスカッションを続ける中で、JTF として編纂するスタイルガイドの方向性について認識を統一する必要性が生じました。同時に、そもそも日本語スタイルガイドの目的は何かを再確認しました。この SINAPS Forum で提示された基本方針は次のとおりです。

●日本語スタイルガイドの目的とは

- ・ 和訳プロセス全体を効率化すること。
- ・ アクセシビリティへの配慮(読み上げソフトの利用時など)も必要ではないか。
→「アクセシビリティへの配慮」とは、文意に影響しない補助的な要素をできる限り排除して、より多くの人が情報に接することができるように配慮すること
- ・ 今後ふえると思われる機械翻訳での処理しやすさも視野に入れるべき。

●日本語スタイルガイド編纂の基本方針

- ・ 実務文書の和訳に使用するガイドラインである。
- ・ 原文を英語と限定しない。
- ・ したがって、and や or の訳し方など、英日翻訳を前提とした規定は不要。
- ・ 表記について考えるときに、原語の区切りを前提として考えるのではなく、日本語として適切な区切り方を検討する。

さらに具体的に、望ましいスタイルガイドのあり方として、次の点が挙げられました。

●スタイルガイドの目標

- ・ 訳文に統一感を持たせる。
- ・ 置換や検索機能を使った編集作業の間違いを防ぐ。
- ・ 翻訳の各工程における非効率化を防ぐ。

●運用方針

- ・ 原則は「遵守」。
- ・ 適用すると無理が生じる場合には、適用除外できる柔軟性も必要。

●望ましいスタイルガイド

- ・ 情報が整理されている。
- ・ 規定が多すぎない。
- ・ 規定がシンプルで例外が少ない。

- ・ 汎用性が高い。
- ・ 規定の適用条件が明確、主旨説明が付記されている。
- ・ 規定の頻繁な変更や極端な方針転換がないか、ほとんどない。
- ・ 規定の変更が変更履歴として明記されている。

●内容/構成

- ・ 「統一性を維持するためのルールを示す部分」と「翻訳品質向上のためのガイドラインを示す部分」を分ける。
- ・ ルールは、翻訳者によって解釈が変わることがなく、チェックツールでシステムチックに定義可能なものに限定する。
- ・ 推奨する文章表現、定形表現、避けるべき表現などをガイドラインとして掲載する。

4. 具体的なスタイルの検討

これらを確認したうえで、SINAPS Forum の開設期間の後半では、具体的なスタイルに関する意見交換が行われました(付録 B をご参照ください)。

どのルールに統一するかについて、比較的容易に意見がまとまるものと、なかなか結論が出せないものがありました。中でも、カタカナ複合語の区切りに関するルールは、現行のいずれのルールにも一長一短があり、最終的にはクライアント企業の選択にゆだねる形で提案する方向になりました。

付録 A : SINAPS Forum での具体的なディスカッション内容

A-1 : スタイルガイドとの付き合いかた

● 翻訳者からの意見

- ・ 翻訳スタイルガイドの存在を知らなかった。
- ・ IT 翻訳ばかり請けるようになる前は、細かい表記の違いはほとんど気にしていなかった。
- ・ スタイルガイドがなくても Web サイトや一般的な表記ハンドブックで十分に判断可能では。
- ・ スタイルガイドの適用については原則「遵守」が前提となっている。
- ・ スタイルガイドが細かすぎて逆に翻訳者の足を引っ張っている。スタイルガイドを見るだけで時間がかかる。翻訳途中で何度もスタイルガイドを参照しなければならず、はかどらない。
- ・ 長音やスペースの入れ方、記号の使用方法など、まちまちなスタイルに合わせるために費やされる労力は、本質的な翻訳の質にあまり貢献しない割に、ウェイトが大き過ぎるように思う。
- ・ たとえば製品の買収などで旧版のスタイルと買収後のスタイルガイドが一致しない場合、旧版部分の修正が発生する場合でも、クライアントからの追加支払があるケースは少ない。
- ・ 「とりあえずスタイルガイドを守っていれば文句を言われなから守っておこう」という、「本当にふさわしい表現を考えない」方向に流れがちになる。

● 翻訳会社の立場からのご意見

- ・ 発注側では「なんとか統一」しようとして、あれもこれも規定する傾向がある。
- ・ 特に大型プロジェクトでは、「個々の翻訳者の判断や裁量」をできるだけ排除しようとする。
- ・ 訳文のチェックといえばスタイルガイドを遵守しているかどうかのチェックだった。
- ・ クライアントからスタイルガイドが提供されない場合、翻訳会社内のチームで暫定的なスタイルガイドを作成する。
- ・ ソースクライアント社内では、翻訳の品質を何らかの形で数値化(採点)する必要に迫られる場合がある。その評価基準の 1 つとして、スタイルガイド違反の有無をチェックする減点方式が手っ取り早いのではないかと。

●スタイルガイド自体の管理についての問題点

- ・ スタイルガイドを新しく作成するときに、特定の企業のスタイルガイドを参考にしながらも、「真似た」と思われたくないので微妙に変えた結果、少しずつ異なるスタイルガイドが多数できてしまう。
- ・ スタイルガイドの最終的な作成責任者が、担当部署のいち個人に過ぎない場合がある。担当者が退社した後、誰もメンテナンスしないままになっているケースもある。
- ・ スタイルガイドの「運用ガイド」が必要なのではないか。
- ・ 各社が独自スタイルに固執することが原因で余分に払い続けるコストと、統一に向けた一時的なコストを比較をしてみるべきではないか。

●スタイルガイドに望むこと

- ・ 情報が整理されていること、検索性にすぐれていること、知りたい情報がすぐに見つかること。
- ・ 規定そのものが少ないこと、規定がシンプルであること(例外規定が少ないこと)。
- ・ 適用条件が明確であること。
- ・ 矛盾がないこと。
- ・ 連動する規定が少ないこと(連動があるときは、連動先がすぐにわかること)。
- ・ あまり頻繁に更新しないこと。更新した場合は更新箇所を明示してほしい。
- ・ ルールが決められた理由や根拠も示してほしい。

●スタイルガイドを使うときの工夫

- ・ 最初に全体にざっと目を通し、確認が必要になったときに該当箇所個所を参照する。
- ・ 見なくていい情報はスルーする。
- ・ 大きく影響するスタイルをメモに抜き出す。
- ・ チェックツールを使う。
- ・ ATOK を使う(記号の半角/全角変換を指定するなど)。

- MS Word のオートコレクトはオフにする
- 大きく表記方法の異なるクライアントについては、別の単語登録辞書を作っておく。

●スタイルガイドをひな形で支給する方法

- ある翻訳会社は、翻訳案件ごとに異なるスタイル(表記ルール)を、毎回同じフォーマットに当てはめたリストとして支給している。本当に必要な項目はもっと限定・整理できるのではないか。
- 「基本仕様のひな形」をチェックツールと連動できると便利。

●スタイルガイドで参照頻度の高い項目と低い項目

- まず全体をざっと確認する。見出しが整理されているか、必要な規定がそろっているか、文章の書き方や翻訳の仕方についてどんな指示があるか、などを確認。
- 文体や表現の傾向もなるべく最初のうちに確認する(後から修正すると手間がかかるから)。支給される資料や Web サイトも参考にする。
- カタカナ語に関する規定(音引き、複合語の区切り方など)。
- 定型表現があるかどうか。
- and や or の訳し方に規定があるか。

●スタイルガイドに規定がないケース、表記に関する指示が不統一なケース

- スタイルガイドは共通だがプロジェクトごとに規定が少しずつ異なる場合がある。発注側が、プロジェクトごとの翻訳指示書で表記に関する指示を追加すると、支給する資料が増え、煩雑になる。
- IT 系の案件では、ユーザーインターフェースの名称やメッセージの表記方法が、製品とその製品が使用されるプラットフォームの間で一致しない場合がある。表記についての明確な規定がないこともある。
- 既訳、スタイルガイド、用語集の間で、表記が統一されていない場合がある。発注側は、どれを優先すべきかの指示を出すのが、指示の内容によっては、作業量が大きく増える場合がある。

A-2：スタイルガイド遵守と翻訳品質

●翻訳の品質とは

- ・ 品質レベルについては、対象読者や用途に応じて、各品質要件の優先度が、当然、異なる。また、スケジュールによっても優先度は変わる。
- ・ 必要な品質レベルは発注元のソースクライアントが決めるもの。しかしそのレベルに関して発注側と受注側の意識の摺り合わせがないまま翻訳が進められることがある。

●実務文書において表記のゆらぎが好ましくない理由

- ・ 読み手を混乱させる場合がある。
→どのような層の読み手にとっても、読みやすく、内容を理解しやすい書き方にする
- ・ 最新技術を効果的に利用できない。
→検索、テキストマイニング、機械翻訳など

●スタイルチェックツールについて

- ・ ある仕事でチェックツールを使ったら便利だったが、他の会社の仕事には使えない。
- ・ 標準的なチェックツールが登場しない理由は、翻訳対象ファイル形式の多様さにあるのでは。現実的には、どんなファイルも特定のフォーマットに置き換えて、同じツールで処理している。
- ・ TMX 規格に準拠していても、実際のファイルの中身は翻訳支援ツールによってかなり違う。
- ・ スタイルガイドがある程度統一されれば、ルールリストの作成や管理が楽になる。
- ・ オープンソースやシェアウェアとして汎用性の高いチェックツールを開発、維持していくのはどうか。
- ・ 文章校正機能とは分けて、スタイルチェック機能に絞って価格を抑えた方が、より普及しやすいのでは。
- ・ スタイルガイドの内容を、チェックツールで機械的にチェックできるルールに絞り込み、チェックツールとスタイル定義ファイルをセットで提供することで、「納品時にはスタイルガイド準拠は当然チェック済み」という前提ができあがり、品質を測定する項目としてはそれほど重視しないという相互の了解ができないか。

付録 B：実際のスタイルに関するディスカッション

実際のスタイルの関しては、次のようなディスカッションが行われました。

●カタカナの長音記号

JIS 規格では長音記号を付けていないが、標準的な日本語スタイルとしては長音記号を付けるの合理的と思われる。

●カタカナ複合語の区切り

主に、「区切りなし」、「中黒」、「半角スペース」の 3 種類があり、それぞれメリットとデメリットがある。

●全角文字と半角文字の間のスペース

文書コンテンツとは関係ない不要なデータなので、「半角全角間のスペースなし」が望ましい。

●常体と敬体の使い分け

箇条書きや図表内での文体で判断に迷うケースがある。

●漢字の送り仮名

基本は本則。動詞と名詞で送り仮名の慣用が違う場合、慣用が固定しているとまで言えない場合に判断が必要になる。

●漢字とかなの使い分け

形式名詞、補助動詞、補助形容詞は、かな書きにするかどうか。

●文字・記号類の全角と半角

●算用数字の位取り表記

以上